1　東京都･大阪市中央卸売市場の需給動向（令和４年８月）

野菜振興部　調査情報部

【要約】

●東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万3025トン、前年同月比95.9%、価格は１キログラム当たり259円、同107.0%となった。
●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は３万8251トン、前年同月比97.5%、価格は１キログラム当たり231円、同109.5%となった。
●東京都中央卸売市場における指定野菜14品目の価格のうち、平年を下回ったものは、はくさい（平年比54.8%）、キャベツ類（同66.6%）、レタス類（同78.2%）、なす（同84.5%）、きゅうり（同86.7%）、さといも（同91.6%）、ピーマン（同96.6%）、平年を上回ったものは、だいこん（平年比138.0%）、たまねぎ（同135.3%）、にんじん（同124.8%）、ねぎ（同121.5%）、トマト（同121.0%）、ほうれんそう（同102.4%）、ばれいしょ（同102.1%）、となった。
●10月は東北産や北海道産の果菜類や根菜類が終盤を迎えるが、不作気味で、例年より切り上がりが早まると予想される。産地リレーの時期を迎え、出回り不足が懸念されるところであるが、北関東産や高原産地産が充実しており、ある程度穴を埋めると予想される。

（１）気象概況

上旬は、北日本では、低気圧や前線、湿った空気の影響を受けやすかったため、曇りや雨の日が多く、北日本日本海側と北日本太平洋側の旬降水量はかなり多かった。東日本では、旬の中頃は、前線や湿った空気の影響で曇りや雨となったが、旬のはじめと終わりは、太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かった。気温は、西日本を中心に暖かい空気に覆われやすく、晴れて気温が平年を上回った日が多かったため、西日本の旬平均気温はかなり高かった。旬平均気温は、東日本で高く、北日本と沖縄･奄美では平年並だった。旬降水量は、東日本日本海側で多く、沖縄・奄美で少なかった。西日本日本海側と東・西日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、沖縄・奄美でかなり多く、西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。一方、北日本日本海側と北日本太平洋側で少なかった。東日本日本海側と東日本太平洋側では、平年並だった。

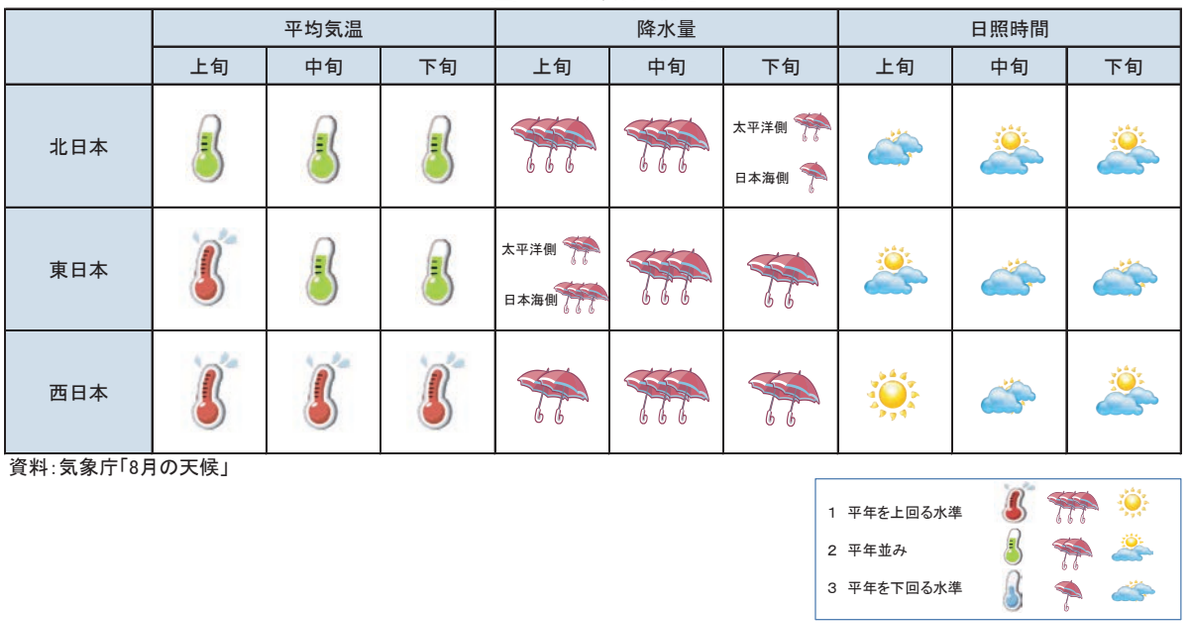
中旬は、北･東･西日本では、低気圧や前線、湿った空気の影響を受けやすかったため、曇りや雨の日が多く､各地で大雨となった。また、13日は伊豆半島に上陸した台風第８号の影響で、東日本太平洋側を中心にまとまった雨が降った。このため、旬降水量は、北・東・西日本日本海側と北・東日本太平洋側でかなり多く、平年比は北日本日本海側で249%、東日本日本海側で347%となり、それぞれ1946年の統計開始以降、８月中旬として１位の多雨となった。旬平均気温は、沖縄・奄美でかなり高く、西日本で高かった。北・東日本では平年並だった。旬間日照時間は、東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で少なかった。一方、沖縄・奄美で多かった。北日本日本海側と北日本太平洋側では平年並だった。

下旬は、北日本では、移動性高気圧に覆われた日が多かったため、北日本日本海側は旬降水量が少なかった。東・西日本では、旬の前半は低気圧や暖かく湿った空気の影響を受けて、大雨となった所があった。旬の後半は、動きの遅い前線の影響などで、東日本では曇りや雨の日が多い一方、西日本では移動性高気圧に覆われて晴れた所が多かった。旬平均気温は、沖縄・奄美でかなり高く、西日本で

高かった。北・東日本では平年並だった。旬降水量は、東・西日本日本海側と北・東・西日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並だった。旬間日照時間は、東日本日本海側と東日本太平洋側で少なかった。北･西日本日本海側と北･西日本太平洋側、沖縄･奄美では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図１）。

図１　気象概況



資料：気象庁「8月の天候」

（2）東京都中央卸売市場

８月の東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万3025トン、前年同月比95.9%、価格は１キログラム当たり259円、同107.0%となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（８月速報）

品　目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	113,025	95.9	93.1	259	107.0	97.7	258	262	258
だいこん	6,793	92.7	83.5	138	148.1	138.0	151	131	132
にんじん	5,670	89.6	81.9	144	109.8	124.8	137	138	158
はくさい	6,276	86.5	91.7	59	72.8	54.8	54	59	64
キャベツ類	16,899	101.1	102.0	69	92.3	66.6	68	72	66
ほうれんそう	643	91.4	97.0	850	108.7	102.4	731	895	952
ねぎ	3,356	97.2	86.9	403	134.9	121.5	352	474	403
レタス類	9,818	106.2	106.3	144	83.3	78.2	128	148	158
きゅうり	7,728	97.3	95.9	283	92.5	86.7	254	279	318
なす	3,690	102.7	95.8	281	87.4	84.5	270	277	296
トマト	7,429	90.6	88.4	401	127.9	121.0	375	378	459
ピーマン	2,242	93.7	101.8	398	129.4	96.6	390	449	364
さといも	296	90.8	86.2	373	101.8	91.6	405	400	341
ばれいしょ	4,592	90.9	77.4	142	87.7	102.1	124	146	154
たまねぎ	9,087	84.7	91.3	137	134.9	135.3	167	131	120

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、入荷減から堅調に推移し、安めに推移した前年を５割近く上回り、平年を４割近く上回った（図２）。

葉茎菜類は、ほうれんそうが中旬以降価格を上げ、やや安めに推移した前年を１割近く上回り、平年をわずかに上回った（図３）。

果菜類は、トマトの価格が中旬以降に上昇し、やや安めに推移した前年を３割近く上回り、平年を２割強上回った（図４）。

土物類は、たまねぎが一時の高値からは落ち着いたものの、引き続き堅調な動きが続き、安めに推移した前年を３割以上上回り、平年も３割以上上回った（図５）。

なお、品目別の詳細については表２のとおり。

図２　だいこんの入荷量と卸売価格の推移

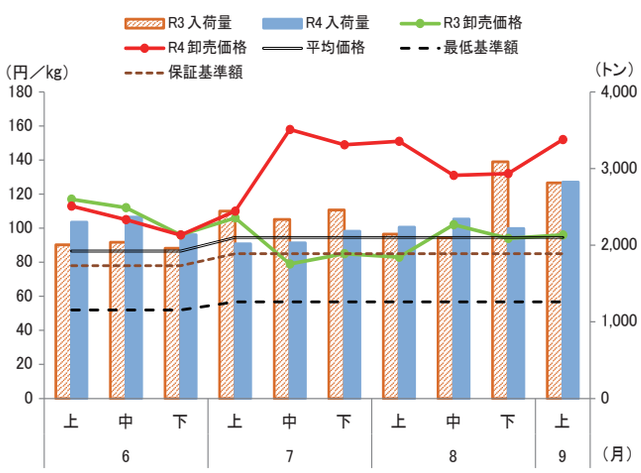


図３　ほうれんそうの入荷量と卸売価格の推移

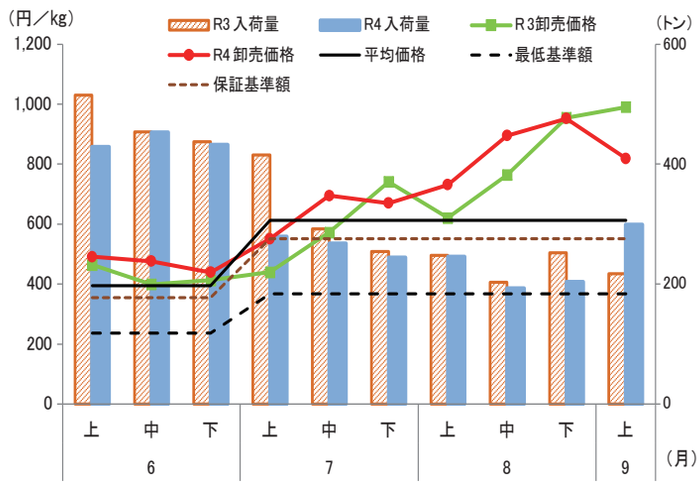


図４　トマトの入荷量と卸売価格の推移

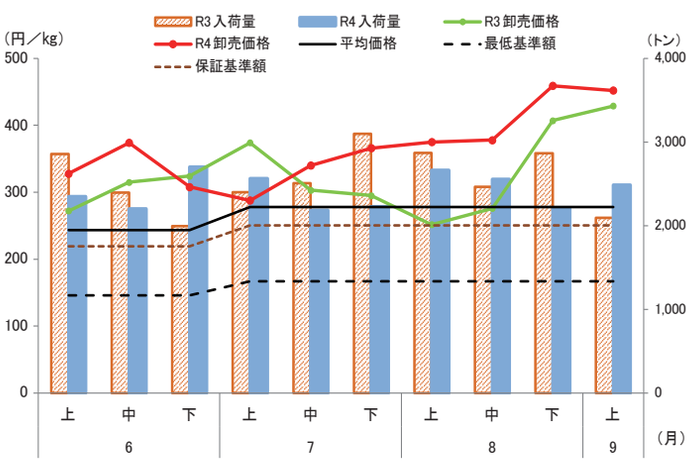
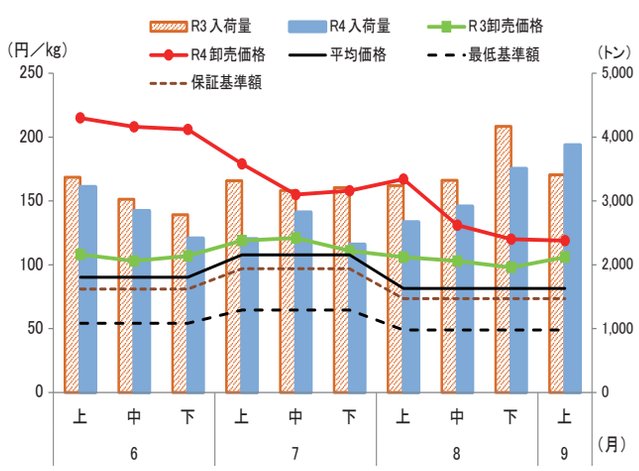


図５　たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1　卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2　平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3　事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産を中心に青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、一部抽苔（ちゅうだい）の発生が見られるもののおおむね順調。青森の作付けも前年並み、5月の干ばつの影響で全体的にやや肥大不足。軟腐病など病害の発生が散見され、品質低下が見られた。豪雨の発生が続いており、今後の影響が懸念される。総入荷量は少なかった前年を1割近く下回り、平年を2割近く下回った。 価格は入荷減から堅調に推移し、安めに推移した前年を5割近く上回り、平年を4割近く上回った。
	にんじん	北海道産中心の入荷となった。作付けは前年並みから一部産地で減少し、一部地域で低温の影響による生育遅れが見られた。また、豪雨の影響による品質低下が見られたが、全体としてはおおむね順調。総入荷量は少なかった前年を1割強下回り、平年を2割近く下回った。 価格は不足感から月間を通して堅調な動きとなり、高めに推移した前年を1割弱上回り、平年を2割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響による生育遅延がみられたが、7月に入り適度な降雨により回復し、生育はおおむね順調。総入荷量は多かった前年を1割以上下回り、平年を1割近く下回った。 価格は気温上昇での需要減退と加工需要の落ち着きから、安めに推移した前年を3割近く下回り、平年を5割近く下回った。
	キャベツ類	群馬産を中心に岩手産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、5月の低温の影響から回復し生育は順調。コロナ禍での労働力不足も解消されている。岩手産の作付面積は前年並みで、7月中旬以降の日照不足により生育が停滞。軟腐病の発生も散見された。総入荷量は平年並みであった前年をわずかに上回った。 価格は安めに推移した前年を1割近く下回り、平年を3割以上下回った。
	ほうれんそう	群馬産、栃木産を中心に関東産の入荷となった。岩手産の作付けは前年を下回るが、その他産地の作付面積は前年並み。関東産の高冷地中心で、7月の曇雨天と低温で生育は遅延傾向であったが、8月上旬からの天候回復によりおおむね回復。虫害の発生は少ないものの、病害の発生が散見されている。総入荷量はやや多かった前年を1割近く下回り、平年をやや下回った。 価格は中旬以降価格を上げ、やや安めに推移した前年を1割近く上回り、平年をわずかに上回った。
	ねぎ	茨城産の夏ねぎを中心に秋田産、北海道産、青森産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで生育はおおむね順調。秋田産の作付けは前年並み。長雨が続き防除も進まなかったことから軟腐などの病害が発生している。北海道産の作付けは前年並み。生育は順調に推移していたが、一部産地での豪雨の影響で品質低下。青森産の作付けは前年並み。生育は順調に推移していたが8月初頭の豪雨、その後の高温で品質低下、病虫害も散見されている。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割以上下回った。 価格は豪雨の影響で減少した中旬以降上昇し、給食、業務需要も回復したことから、安めに推移した前年を3割以上上回り、平年を2割以上上回った。
	レタス類	長野産を中心に群馬産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつの影響による生育停滞から、その後の適度な降雨で生育回復。群馬産の作付面積は前年並みで、高温によりやや小玉傾向。軟腐病の発生が散見された。総入荷量は前年、平年ともかなりの程度上回った。 価格はやや安めに推移した前年を2割近く下回り、平年を2割以上下回った。

果菜類	きゅうり 	福島産を中心に岩手産など東北産中心の入荷となった。各産地とも作付面積は前年並みだが、岩手産は前年を下回った。福島産は7月以降の適度な降雨により、生育回復傾向にあるものの草勢低下による曲がり、変形果の発生が多く、夜温の上昇によるL品率が増加。また、病虫害の発生が平年より多く見られた。各産地曇雨天の影響で全体に生育が緩慢であり、病害の発生が多い。総入荷量は前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。 価格は安めに推移した前年を1割近く下回り、平年を1割以上下回った。
	なす 	群馬産を中心に栃木産など関東産中心の入荷となった。各産地作付面積は前年並みだが、栃木産は前年をやや下回る。各産地とも生育は、低温による遅れから気温の上昇によって回復し、着果量も多く順調。虫害の発生がやや多かった。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格は月間を通して大きな動きなく推移し、安めに推移した前年を1割以上下回り、平年も1割以上下回った。
	トマト 	北海道産、福島産を中心に群馬産、青森産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であるが一部地域で落花や尻腐れが散見された。福島産の作付面積は前年並みで、6月下旬の急激な気温上昇により生理障害の発生が多い。群馬産の作付面積は前年並みで、一部病害が散見されるもののおおむね順調。青森産の作付けも前年並みで、6月の低温から急激な気温上昇の影響に加え、8月初頭の豪雨による冠水被害も見られた。総入荷量は少なかった前年を1割弱下回り、平年を1割以上下回った。 価格は中旬以降に上昇し、やや安めに推移した前年を3割近く上回り、平年を2割強上回った。
	ピーマン 	岩手産を中心に茨城産、福島産の入荷があった。岩手産の作付面積は前年並みで、7月中旬以降の日照不足の影響により生育および肥大がやや停滞。茨城の作付面積は前年並み。秋作も開始となり生育はおおむね順調。福島の作付面積は前年並み。露地作の生育が遅れ気味であったが回復傾向。障害果についても減少しておる。病害は少ないものの虫害がやや平年より多く見られた。総入荷量は多かった前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。 価格は安めに推移した前年を3割近く上回ったものの、平年をやや下回った。
土物類	さといも 	千葉産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、春先の低温による初期成育の停滞により若干遅れてはいるものの病害は少ない。宮崎産の作付面積は前年並みで、曇雨天の影響で掘り取りが遅延していたが、天候の回復に伴い一気に進みはじめた。中国産の輸入は前年を1割以上下回った。総入荷量は前年を1割弱下回り、平年を1割以上下回った。 価格は安めに推移した前年をわずかに上回り、平年を1割近く下回った。
	ばれいしょ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、初期成育で低温・干ばつの影響を受けていたが、8月に入ってからの豪雨の影響により特に道南地区は掘り取りもできず品質、数量ともに低下。総入荷量は少なかった前年を1割近く下回り、平年を2割以上下回った。 価格は気温の上昇による需要減退から、高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに上回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付けは前年並みで、やや干ばつ傾向から8月に入っての大雨により、品質、数量ともに低下の地区はあるものの、道東では大きな影響はなく肥大は十分。中国産の輸入は前年並みとなっている。総入荷量はやや多かった前年を1割以上下回り、平年を1割近く下回った。 価格は一時の高値からは落ち着いたものの、引き続き堅調な動きが続き、安めに推移した前年を3割以上上回り、平年も3割以上上回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

８月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は３万8251トン、前年同月比97.5%、価格は１キログラム当たり231円、同109.5%となった（表３）。

品目別の詳細については表４の通り。

表３　大阪市中央卸売市場の動向（８月速報）

品　目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	38,251	97.5	96.7	231	109.5	97.8	227	237	230
だいこん	2,602	93.3	82.8	132	146.7	135.4	143	130	123
にんじん	2,306	92.1	93.6	141	106.8	127.4	132	130	160
はくさい	3,054	100.6	114.3	61	74.4	55.7	53	60	68
キャベツ類	6,376	97.0	110.1	68	93.2	67.1	69	72	66
ほうれんそう	275	83.3	85.7	867	105.0	101.6	758	908	972
ねぎ	608	98.6	93.5	498	111.7	100.9	425	575	512
レタス類	2,044	95.2	84.0	151	92.6	86.6	138	156	161
きゅうり	2,058	115.4	110.2	276	88.7	80.7	246	270	320
なす	1,069	109.6	104.7	261	83.4	84.2	277	254	249
トマト	2,951	103.8	104.5	378	126.0	114.8	344	366	431
ピーマン	626	92.2	88.6	382	132.6	97.5	362	407	383
さといも	54	91.7	75.8	322	92.3	88.0	340	322	297
ばれいしょ	2,169	93.1	80.8	156	92.3	110.9	148	154	165
たまねぎ	3,921	82.2	83.1	152	140.7	152.8	176	150	131

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年比は過去5カ年平均との比較。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	北海道産を中心として、青森産や岐阜産の入荷などがあった。各産地とも全旬を通じて安定した入荷を続けたが、入荷量自体は多くなかった。北海道産は前年が干ばつの影響で少なかったことから前年をかなり上回る入荷となったが、青森産と岐阜産は前年を大幅に下回った。月間全体でも前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 入荷量が少なく価格が高騰した前月の影響を受け、上旬は高値スタートとなり、中旬以降は落ち着いたが、前年が品質格差のため安値だったこともあり、前年、平年とも大幅に上回った。
	にんじん	北海道産のみの入荷であった。上中旬の記録的な大雨で浸水などの被害があり、品質劣化も発生して入荷減量となった。月間では前年、平年ともかなりの程度下回った。 前月に高騰した影響を受けて高値でスタートし、旬を追うごとに上伸を続けた。下旬には不足感から急騰し、月間では高かった前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産を中心とする入荷であった。販売状況が厳しく、盆の連休前あたりから出荷調整が入り中旬に入荷減量となった。出荷調整は連休明けの下旬まで続き、入荷量は多くないながらも荷動きは悪く量販店、加工筋共に厳しい販売状況が続いた。月間では前年をわずかに上回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は売れ行きが悪いことから安値スタートとなり、出荷調整により中旬以降にやや上伸して旬を追うごとに微増傾向となるも、上げ止まって月間では前年、平年とも大幅に下回った。

	キャベツ類	群馬産を中心として主力の長野産の入荷があった。両産地とも大玉の比率が低く、日中の気温高の影響もあって出荷量が伸びなかった。長野産は中旬に入荷量激減となり、月間でも前年を大幅に下回ったが、群馬産は前年をやや上回った。全体では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回った。 気温高のため品質低下が多く、棚持ちも悪いことから価格は伸びず安値推移となった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。
	ほうれんそう	岐阜産を中心とする入荷であった。高温のため生育不良で産地出荷量は少なく、中旬以降は入荷減量となった。月間では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。 絶対量不足の中、中旬以降に価格上昇となるも、高温の影響による生育不良で下位等級品が多く、価格は伸び悩んだ。月間では前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。
	ねぎ（白ねぎ）	長野産、北海道産、鳥取産を主体とする入荷であった。長野産は順調な出荷を続け、旬を追うごとに増量傾向で、鳥取産は旬を追うごとに減少傾向の中でも前年を上回る潤沢な入荷が続いた。北海道産は上中旬の記録的な降雨の影響があり中旬に入荷量が激減した。下旬には回復したが、月間では前年をかなり下回った。全体では前年をやや下回った。 単価高での推移となり、月間全体では前年をかなり上回った。
	ねぎ（青ねぎ）	青ねぎは徳島産と香川産が主体となり、近隣の奈良産や大阪産の入荷もあった。各産地とも生育良好で産地出荷量は多い中でも、コロナ禍の第7波の影響から外食や加工筋からの注文が少なく、販売には苦戦した。細ねぎは高知産を中心に大分産や静岡産の入荷があった。各産地とも高温の影響から生育不良となり出荷量は少なく、全体では特に中下旬の入荷量が減少し、前年を大幅に下回った。月間全体では前年並の入荷量となった。 コロナ禍の影響で外食や加工筋からの注文が少なく、青ねぎは単価安で推移したが、細ねぎは不足感から中旬以降に上昇した。全体では販売に苦戦し、前年を下回った。
	レタス類	長野産中心の入荷があった。前月の単価安を受けて中旬以降は産地での出荷調整が入り、旬を追うごとに入荷減量となった。出荷調整解除後も高温や降雨の影響で品質低下が目立ち、入荷量は伸びず月間では前年をかなり下回った。サニーレタス・リーフレタスも長野産の入荷で、安定した入荷であったが、玉レタスの価格が安かったことから発注量は少なく、伸び悩んだ。レタス類全体では前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。 出荷調整により入荷減量となったため単価は旬を追うごとに上伸傾向となったが、大きな特売が組めずに販売は苦戦した。品質低下もあって伸び悩み、月間での価格は前年をやや下回った。サニーレタスとリーフレタスも玉レタスの影響を受けて単価安での推移となった。レタス類全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。
果菜類	きゅうり	主力の福島産を中心として、長野産やその他産地の入荷もあった。福島産は潤沢な入荷が続き旬を追うごとに微減傾向も、月間では前年をかなり上回った。長野産も微減傾向ながら順調な出荷を続け、月間では前年をかなり上回った。全体でも前年をかなり上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は入荷量微減傾向に伴って旬を追うごとに上伸したが、前年が盆明けの急騰で単価高となったことから、月間では前年をかなり大きく下回った。ここ数年は同時期に長雨や台風の影響で高騰した年が多く、平年を大幅に下回った。
	なす	千両系は京都産と奈良産を主体として徳島産や群馬産など各産地からの入荷があった。長なすは愛媛産を中心とした入荷であった。上中旬は各産地とも潤沢な出荷を続けたが、下旬には成り疲れも出て樹勢が低下し、出荷減量と品質低下品も発生した。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。 販売状況は厳しく、量販店頼みの販売が続いたことから売場の価格は安く、旬を追うごとに下落傾向となり、月間では前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。
	トマト	岐阜産を中心とし、岡山産、愛媛産、熊本産、北海道産の入荷もあった。上旬は潤沢だったが、降雨の影響などから中旬には入荷減量となった。下旬には再び持ち直し月間では前年、平年ともやや上回った。 堅調な価格のまま旬を追うごとに上伸を続け、高値推移となった。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。

	ピーマン	愛媛産と長野産が主体となり、九州産や東北産など各産地の入荷があった。東北産は、上中旬は降雨の影響などがあったが下旬には回復し、全体でも旬を追うごとに入荷増量傾向となった。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 堅調な価格で推移し、異常な安値だった前年を大幅に上回り、平年をわずかに下回った。
土物類	さといも	国産は宮崎産を中心とする入荷で、輸入の中国産の入荷もあった。宮崎産は特売需要もあり順調な入荷が続いた。中国産はコロナ禍や為替の影響もあり現地価格が高いため入荷減量となった。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 前月からの安値の影響が残る中での特売需要があり、単価安のまま推移した。月間では前年かなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。
	ばれいしょ	丸芋は北海道産を中心とする入荷であった。月の前半は茨城産の残量入荷もあった。北海道産は上中旬の記録的な降雨の影響で出荷が遅れ、旬を追うごとに入荷増量の中でも全旬とも量は少なく、月間でも前年を大きく下回った。メークインは北海道産を中心として青森産などの入荷もあった。丸芋同様、上中旬の記録的な降雨の影響により北海道産は出荷ができず入荷量は伸び悩んだ。月間全体では、少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 降雨の影響で品質が悪いこともあり、入荷量が少ない中、価格は旬を追うごとに上伸傾向も伸び悩んだ。月間では前年をかなりの程度下回り、平年をかなりの程度上回った。
	たまねぎ	北海道産と兵庫産を主体とした入荷であった。北海道産は上中旬の記録的な大雨のため掘り取りが例年よりも遅れ、少ない入荷量からのシーズンスタートとなった。旬を追うごとに入荷増量となったが量は少なく、月間でも前年を下回った。兵庫産はシーズン初めからずっと引き合いが強かったため出荷が前倒しとなり、前月からは出荷調整をしながらの入荷となった。8月は旬を追うごとに入荷減量で月間では前年の半分程度となった。月間全体では前年、平年とも大幅に下回った。 価格は北海道産の入荷増量に伴って旬を追うごとに下落傾向ではあったが、前月までの高値の影響が残り、月間では前年、平年とも大幅に上回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（4）首都圏の需要を中心とした10月の見通し

10月は東北産や北海道産の果菜類や根菜類が終盤を迎えるが、不作気味で、例年より切り上がりが早まると予想される。産地リレーの時期を迎え、出回り不足が懸念されるところであるが、北関東産や高原産地産が充実しており、ある程度穴を埋めると予想される。

９月初旬時点の長期予報では、暖秋傾向とされるが、関東は平年並みの展開が予想されている。猛烈に強くなった台風11号の影響などにより、場合によっては九州産の果菜類のスタートが大幅に遅れることも想定される。

根菜類

だいこんは、北海道産（道央ようてい）が例年より少な目で、10月中旬には切り上がると予想している。６月下旬の降雨で播種できなかったことが影響し、本年産は例年の70%作とみられている。同産（道東標茶（しべちゃ））の現状は計画以上の出荷となっているが、９～10月は播種（はしゅ）できなかった影響で少なくなってくると予想される。降雨が多い中で生育は順調であるが、例年よりやや脆弱な仕上がりとなっている。青森産は播種時期に降雨が多く、土が固くなって蒔（ま）けなかった。９月の出荷は例年の70~50%と不安定で、10月にはやや回復するが、良くて80%程度であり、11月いっぱいで切り上がると予想される。千葉産は10月に入ってからの出荷となろうが、現状までの作業は順調である。年内いっぱいまでピークと予想され、作付けは前年並である。

にんじんは、北海道産（道北斜里）は多雨の影響で、圃場（ほじょう）で傷みも見られるところである。現状の出荷は例年の70%程度と少なく、９～10月についても回復は期待できず、少ないままで推移すると予想される。中心サイズ

はＬとＭが半々である。同産（道央ようてい）は９月に入って数量が減り始め、例年の70%程度になった。正品率の低下も影響し、10月いっぱいは例年の80%程度のペースで推移すると予想される。中心サイズはＭ中心のＬと予想される。

葉茎菜類

キャベツは、群馬産は長雨や高温・干ばつなど問題の多い年ではあったが、大きな影響はなく現状は生育順調である。10月20日過ぎには減り始めるが、10月いっぱいは潤沢で需要に応えることができると予想される。岩手産は大雨で流されるなど定植が十分に行われず、圃場での腐れもあるなど出荷は例年の80%のペースとなっている。10月も天気の回復が予想つかないため、かなり出荷が減ると予想している。気温が下がれば10月中旬で切り上がる可能性もある。

はくさいは、長野産の現状は特段天候の影響は受けておらず、例年並みに順調な出荷が続いている。標高の高い産地は10月いっぱい、６玉Ｌサイズ中心に例年並みの出荷を予想している。

ほうれんそうは、岩手産は８月の豪雨で一部ハウスに浸水があり播種できず、９月までは例年の80%程度の出荷となった。10月には平年並みかやや少ないレベルまで回復してこよう。群馬産（新田郡）は高温の影響で若干遅れ気味であったが、現状ようやく増えてきている。９月下旬から10月上旬に１回目のピークが来て、その後年内は平準ペース推移すると予想される。大きな天候被害はなく順調で、露地は11月に始まると予想される。同産（利根沼田）は９月いっぱいで雨除け物は終了し、10月に入り露地物となり、平年並みの出荷を予想している。栃木産は現状までは例年の70%ペースの出荷となったが、暑さに弱い品種であることや７月初め頃の雨により生育が停滞した。現状は回復基調にあり、９月中旬には例年並みの出荷に戻ると予想される。

ねぎは、茨城産は天候に恵まれ、生育順調である。少雨のため昨年産のような品質劣化はみられない。本年産は施肥の段階で窒素分を少なくしており、例年よりＭサイズが多くなっている。10~11月はレタスの作業に注力するため急増はないが、平年並で少なかった前年を上回ると予想される。青森産の現状は例年どおりスタートしたばかりである。雨による病気などにより品質はやや悪くなると予想しており、最終は11月いっぱいを予想している。北海道産の出荷のピークは10月いっぱいで、11月中旬には切り上がると予想される。雨の影響で十分な防除が出来ず、例年よりも病気が多くみられるが、作付けが増えているため前年を大きく割り込むことはないと予想される。

レタスは、長野産はこの夏にまとまった降雨もあったが、出荷への影響はなく平年並みとなっている。10月は雨の影響で少なかった前年を上回り、2020年産並みの出荷と予想され、16玉Ｌサイズ中心の見込みである。茨城産は天候に恵まれ、播種・定植は順調に行われた。春レタスの価格が堅調だったこともあり、秋物の作付けは微増ペースとなっている。９月下旬の初期物はそれ程多くなく、10月２週目からピークを迎えると予想している。兵庫産は例年どおり10月上旬から始まるが、最大のピークは12月で、10~11月は徐々に増える時期であり、作付けは若干減少すると予想している。群馬産の現状は順調に増えてやや多めである。10月10日頃までまとまった量を出荷できるが、その後切り上がりが早まる可能性もある。

果菜類

きゅうりは、群馬産の抑制物は現時点では生育順調である。出揃う９月25日前に１回目のピークが来て、その後10月上旬後半に２回目のピークが来ると予想される。全般的な日照不足の中で、急増はなく、微増で推移すると予想している。埼玉産の抑制物は天候被害もなく順調である。10月10日頃に最初のピークが来て、加温物が始まる11月上旬にもう１度ピークが来ると予想される。作付面積は前年並であるが、定植の本数を減らす傾向もあ

る。燃料代の高騰で、若干早めの展開が予想される。宮城産は抑制物となるが、８月の定植した物は曇天が続いてやや伸び悩みが目立った。９月いっぱいピークが続き、10月には寒さからやや減るが、11月上旬まで東京市場に前年並に出荷できると予想される。

なすは、高知産は例年と同様、早い生産者は９月中旬から始まった。当面のピークは10月下旬から11月上旬と予想され、作付けは前年並である。栃木産の生育は順調であるが、高温の影響で前年比では若干少ない。10月の出荷は淡々と続き、10月下旬に降霜があれば切り上がると予想される。福岡産は例年どおり９月２日から出荷が始まった。当面のピークは11月であるが、10月も順調に出荷できると予想される。新規就農者もいるため、前年の105%程度の出荷を予想している。台風11号の影響は心配していない。

トマトは、千葉産の抑制物は８月26日から始まったが、積算温度が高かったため初期からまとまった量となっている。９月10日過ぎからピークとなり、10月上旬まで続いてその後はやや減少すると予想される。作付けは前年並で、品種は「りんか409」である。群馬産は例年より順調に推移し、数量、金額ともに平年・前年の実績より上回った。11月初旬に切り上がると予想される。青森産は極端な気候の変化に木が追いつかず、現状までは例年の80%ペースとなり、９～10月も同様に少な目での出荷が続くと予想される。中心サイズはＭ・Ｓで、例年と同様であれば11月に入り気温が下がれば切り上がると予想される。愛知産の作柄は平年並みで、ピークは11月であるが、10月は例年並みの出荷と予想される。作付けは前年並である。栃木産は抑制物と越冬物の出荷となるが、天候に恵まれ生育順調。日中の寒暖の差がやや大きく、今後裂果の心配はあるが、前年を上回る出荷と予想される。

ピーマンは、茨城産は９～10月の秋ピーマンは７月上旬に定植した。現状までの２カ月間は前半に晴天が続いたため実はついているが、その後２週間は天気が崩れて花落ちがやや見られる。９月中旬に入って一旦減るが、後半から10月初め頃にかけて当面のピークが来ると予想している。生育はおおむね順調である。岩手産は今年は圧倒的な日照不足もあり、前年の90%程度とやや少なめの出荷となっている。盆の時期の大雨で終了してしまった生産者もいる。露地は９月いっぱい、ハウスは10月末までと予想しているが、暖秋暖冬傾向となればもう少し後ろにずれると予想される。10月は80%程度の出荷と予想している。

土物類

さといもは、埼玉産は秋の長雨の影響も心配されるが、生育は順調で例年どおり10月上旬からの出荷を予定している。「土垂（どたれ）」のＬ・２Ｌサイズ中心で、12月に向けて徐々に増えてくると予想される。作付けも前年並で、例年並みの出荷を予想している。

ばれいしょは、北海道産（道央ようてい）の試し掘り調査によると、例年並みの作柄が予想された。８月の大雨で圃場によっては冠水したり、土壌流亡の被害があった。昨年が不作であったことから前年より多く、平年比では10%程度少なくなると予想している。ただ台風11号がらみの降雨で収穫が進まず、病気の広がりが心配される。同産（十勝芽室）のメークインは９月10日前後から始まるが、今のところ平年作を予想している。玉付きは良いがやや小ぶりである。10~11月が出荷のピークと予想される。

たまねぎは、北海道産（道北きたみらい）の収穫は９月いっぱいで終わる。本年産は気象災害があったが、被害は最小限に抑え、ほぼ平年作と予想している。Ｌ大サイズ中心に10月から年明け４月まではほぼ平準ペースで出荷されると予想される。同産（道央岩見沢）の極早生の生育は悪かったが、現状の早生になって回復してきている。出荷のピークは９~11月であるが、年明けも全体の40%程度と予想される。中心サイズはＬとＬ大が半々の予想で、全体では平年作と予想される。

その他

ブロッコリーは、福島産の秋冬物は早いものは９月下旬から始まり、10月９日の週にピークが予想される。11月中旬でほぼ切り上がるが、11月いっぱい出荷する人もいる。高齢化により、作付けは50ヘクタールとこの10年で半分に減っている。埼玉産は例年どおり10月上旬から始まると予想される。作業は順調で、当面のピークは11月上中旬であり、10月は平年並を予想している。長野産の現状は病気の発生も散見されてやや出荷は減っているが、９月中には回復すると予想される。出荷のピークは９月25日頃から10月上中旬までとなり、出荷そのものは11月いっぱい続くと予想される。

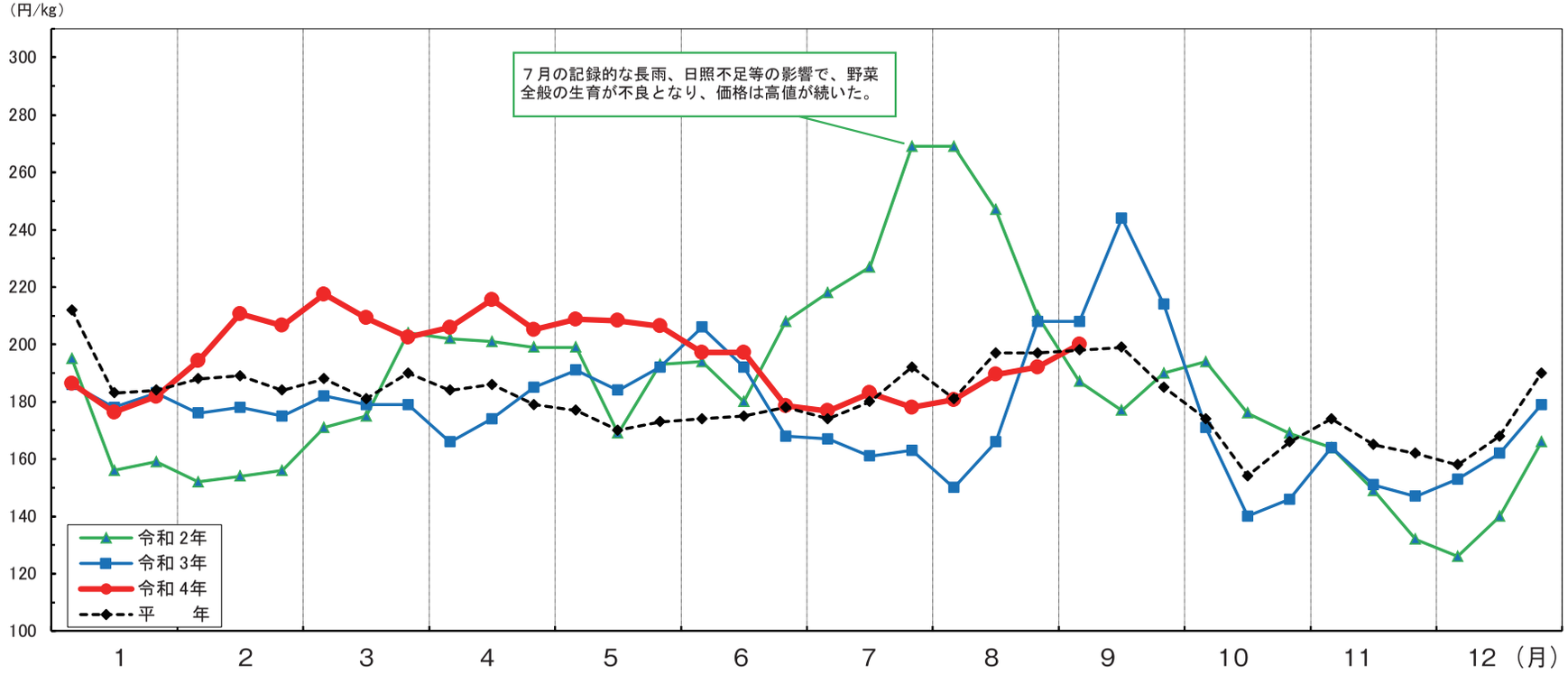
かぼちゃは、北海道産の現状は収穫が始まったところだが、出荷のピークは例年どおり９月下旬から10月と予想される。11月にはほぼ終了し、12月に冬至用として再び始まると予想される。今年はまとまった雨で葉の損傷も見られ、やや早めに収穫される可能性がある。肥大に問題ないが、やや玉数が少ないと予想している。本年産は平年作に届かないと予想される。輸入物（ニューカレドニア）は現地の天候が悪く、生育は悪い。そのため現時点では輸入されるか判断できないが、10月は例年を下回ると予想される。

かんしょは、徳島産は今年、通常の梅雨のパターンでなかったが、日照時間が長かったことから大ぶりの仕上がりとなっている。目立った自然災害もなく、豊作型である。出荷は８月に多く、９月はだいこんの播種作業の影響で減り、10月に再び増えると予想される。その後11月から年末に向けて増えていくと予想される。中心サイズはＬと２Ｌが半々くらいと予想される。千葉産は９月に入り出荷も収穫も本格化してくるが、作柄は良好でやや豊作を期待している。後半に植え付けた物の状況が現状では分からない。当面のピークは９月で、10~11月は収穫に注力して出荷量はややダウンすると予想される。

ながいもは、青森産は10月いっぱいは令和３年産の貯蔵物であり、前年の80%程度と少ない見込み。令和４年産は８月の豪雨での被害により収量がダウンする可能性もある。

（執筆者：千葉県立農業大学校
講師　加藤　宏一）

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

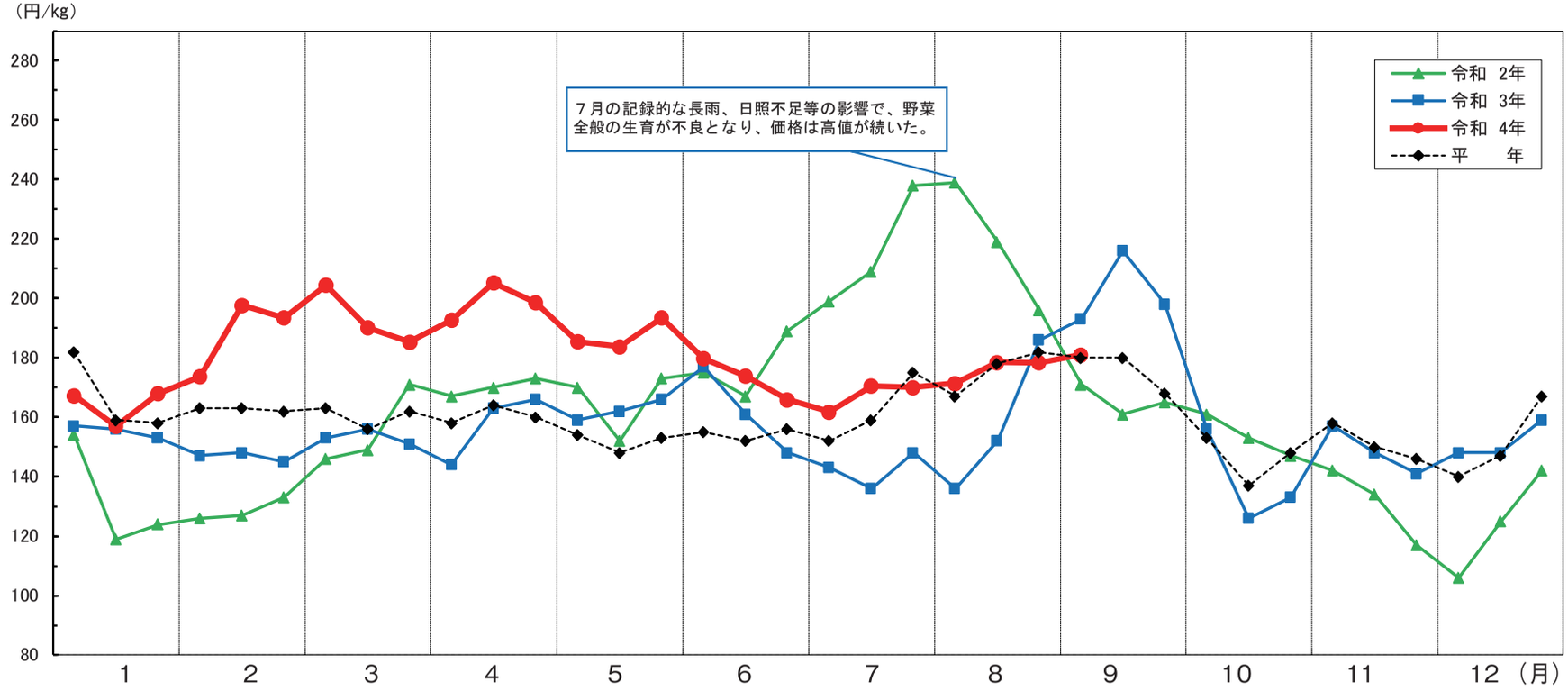


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和２年	195	156	159	152	154	156	171	175	204	202	201	199	199	169	193	194	180	208	218	227	269	269	247	210	187	177	190	194	176	169	164	149	132	126	140	166
令和３年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179
令和４年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200											
平　　年	212	183	184	188	189	184	188	181	190	184	186	179	177	170	173	174	175	178	174	180	192	181	197	197	198	199	185	174	154	166	174	165	162	158	168	190

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成29年～令和３年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和２年	154	119	124	126	127	133	146	149	171	167	170	173	170	152	173	175	167	189	199	209	238	239	219	196	171	161	165	161	153	147	142	134	117	106	125	142
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181											
平　　年	182	159	158	163	163	162	163	156	162	158	164	160	154	148	153	155	152	156	152	159	175	167	178	182	180	180	168	153	137	148	158	150	146	140	147	167

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（平成29年～令和３年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場および大阪東部市場のデータである。